

## 市史で候 第六十六の巻 おまけ

### ちょっと長い 市史講演会第4回の報告

市史講演会第4回 講師：谷口康浩先生（清瀬市史編さん考古部会長、國學院大學）、演題：「清瀬の縄文ムラと中期縄文文化」（2020.1.25.開催）のちょっと長い報告です。

図・写真は当日のスライドから（一部改変）と、市史編さん室作成・撮影です。

#### 縄文時代はいつから？

1998年、青森県東津軽郡蟹田町（現外ヶ浜町）のおおだいやまもとの大平山元I遺跡から、無文の縄文土器片が出土しました。小さなかけらばかりでしたが、ついていた炭化物（おこげ）をもとに年代を測定したところ、16,500年前という、土器としては当時世界でも最古の年代が測定されました。これは当時新聞で大きく取り上げられ、高校の歴史の教科書にも載るようになりました。

大平山元I遺跡の発掘調査を行い、名古屋大学の中村俊夫先生に土器の年代測定を依頼したのが、若き日の谷口先生でした。

16,500年前というと、氷河期の終わりのころ、まだとても寒い時期です（図1、中ほど下のギザギザの線が気温）。土器の出現をもって縄文時代とする時期区分では、この年代が明らかになったことで、縄文時代の始まりはまだ氷河期ということになってしまいました。谷口先生は縄文時代、縄文文化を、温暖な環境の中で発展、発達した文化ととらえ、土器が出現して少し経ってからの、氷河期が終わって温暖化が始まる11,500～11,700年前以降を縄文時代の始まりと考えるようになったそうです。

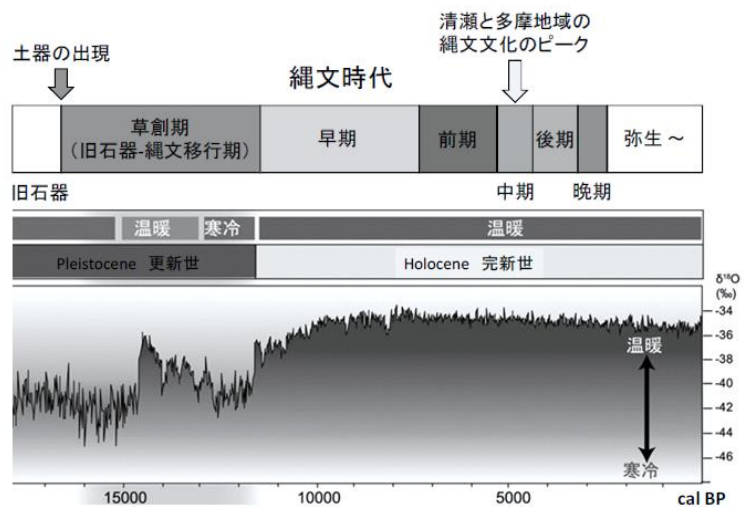


図1 縄文時代の年代・時期区分と環境史

#### 縄文時代の中期とは？

縄文時代は、土器の特徴と変遷を元に6つの時期に分けられています（図1の一番上の帯が縄文時代の時期区分）。

縄文時代中期は、約5,400年前～4,400年前の、大体1,000年間くらいの長さです。このときに、清瀬を含む多摩地域の縄文文化は量、質ともにピークを迎えます。

### 清瀬の縄文ムラと柳瀬川流域遺跡群

清瀬の代表的な中期の縄文ムラは、野塩4丁目に広がる野塩前原遺跡群です(図2破線)。野塩前原遺跡、野塩前原東遺跡が発掘されています。近くには野塩外山遺跡もあります。

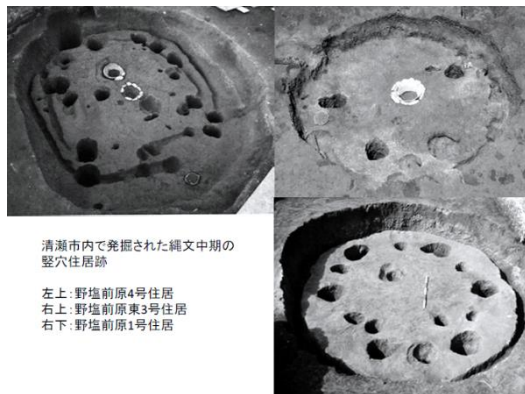
ここは、縄文時代中期の中でも、特に中期中葉(中期の中頃)から中期の終わりくらいまでのムラです。実年代では、おおよそ5,200年前~4,400年くらい前の800年間ほどにあたります。

野塩前原遺跡、野塩前原東遺跡では、竪穴住居の跡が13軒見つかっています。床はかたく踏みしめられていて、柱穴も大きくて深く、頑丈な上屋が作られていたことがわかります(図3)。

中でも前原東遺跡では集団墓が検出され(図4)、野塩前原遺跡群の中でも、重要な場所であったようです。住居と集団墓が作られた清瀬の縄文ムラが、野塩前原遺跡群なのです。

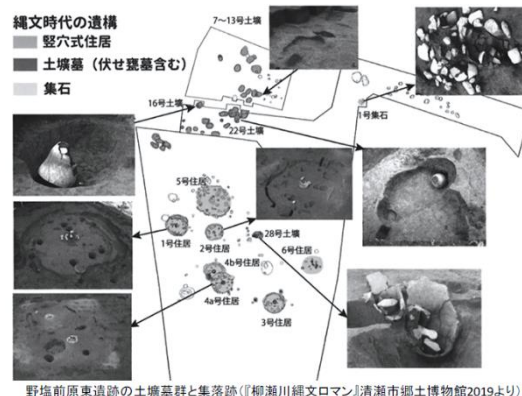


図2 野塩前原遺跡群と野塩外山遺跡の位置



清瀬市内で発掘された縄文中期の竪穴住居跡  
 左上:野塩前原4号住居  
 右上:野塩前原東3号住居  
 右下:野塩前原1号住居

図3 野塩前原遺跡の住居跡



野塩前原東遺跡の土塚墓群と集落跡(『柳瀬川縄文ロマン』清瀬市郷土博物館2019より)

図4 野塩前原東遺跡の土塚墓

柳瀬川の対岸、所沢市域には、野塩前原遺跡群と2km以内の距離に、和田遺跡、西上遺跡があります。和田遺跡は、百数十mの広がりをもつ大きな環状集落で、この地域の本村というような拠点集落と考えられます。近くには下安松遺跡や山際遺跡もあり、野塩前原遺跡群とともに、和田遺跡を中心としたムラのまとまりととらえることができます(図5)。

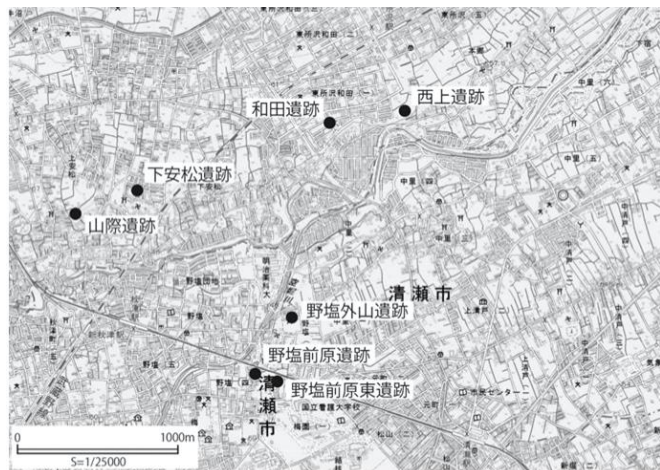


図5 野塩遺跡群周辺の遺跡

もっと上流に行くと、膳棚遺跡、海谷遺跡という拠点集落があります。縄文時代中期の柳瀬川流域には拠点集落を中心としたムラのまとまりがいくつも作られていたことがわかっています。

### 井戸尻・勝坂文化

このような縄文時代中期の活気を生み出した文化を、谷口先生は「井戸尻・勝坂文化」と呼んでいます。長野県八ヶ岳南麓にある井戸尻遺跡群の井戸尻と、相模原市の勝坂遺跡と遺跡名を冠した勝坂式土器の勝坂を組み合わせた名称です。

井戸尻・勝坂文化は、中部高地（諏訪、伊那谷、松本盆地あたりから山梨県域）から関東地方南西部にあたる多摩地域、相模野地域に広がる内陸性の文化で、代表的な物質文化に勝坂式土器、土偶、大形石棒、ヒスイ製品があります。



図6 左：勝坂式土器（野塩前原遺跡出土、清瀬市郷土博物館蔵）  
右：大形石棒と谷口先生（長野県佐久町北沢にて）

井戸尻・勝坂文化の起源は、北陸地方にあることが土偶や集落の研究からわかっています。勝坂系土偶の典型例が国宝・縄文ビーナスです。長野県茅野市棚畑遺跡で出土しました。頭のとっぺんが平らなことが特徴の一つです。谷口先生の土偶の型式・系統についての研究では、この土偶の原型あるいは祖型といってよいものが北陸にあり、それが中部高地に入って勝坂系土偶が生み出されたと考えられています。

八王子市の神谷原遺跡では、中部高地の遺跡で見つかる竪穴住居や石囲い炉に構造がよく似たものが見つっています。北陸地方の遺跡にみられるロングハウス（大型の建物跡）もありました。お墓に入れられた石器も、中部高地の遺跡と共通していました。

同じく八王子市の檜原遺跡では、上部に中部高地系の文様、胴から下に北陸系の文様がつけられた、ハイブリッドともいえる土器が出土しています。

谷口先生は、このような事例は、井戸尻・勝坂文化の起源地を示しているとともに、中部高地系の人たちが関東に入ってきている証拠と考えています。八王子や相模野のあたりが、井戸尻・勝坂文化の多摩地域への入り口と考えられます。

野塩前原遺跡でも、勝坂式土器が見つっています。図7は有孔鏢付土器<sup>ゆうこうつばつきどき</sup>という、井戸尻・勝坂文化の象徴的な土器の一つです。野塩前原遺跡2次調査の3号住居址から出土しました。

野塩前原遺跡の勝坂式土器の造りの精巧さからは（図6・7）、清瀬市域にも中部高地から人が移動してきたことがうかがえます。



図7 有孔鏢付土器<sup>ゆうこうつばつきどき</sup> 高さ：約50cm  
（野塩前原遺跡出土、清瀬市郷土博物館蔵）

### 多摩地域の縄文時代中期と縄文農耕論

図8は、今村啓爾先生による縄文時代の住居の数を集計したグラフです。関東西部・中部地方の住居数が縄文時代中期に飛躍的に増加することから、この時期の大幅な人口の増加が推定されています。

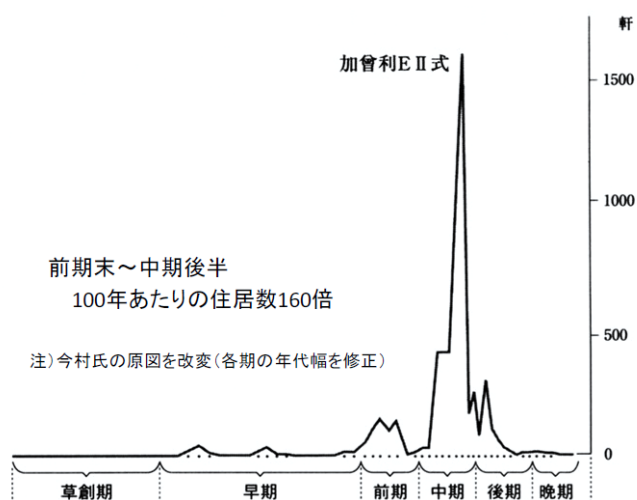


図8 縄文時代の住居数の変化（関東西部・中部地方）

図9は、谷口先生の研究で、関東西部の拠点集落の数の変化から、推定される集落ごとの領域を示しています。縄文時代前期中葉～後葉（図9左）では、拠点的な集落が沿岸部にしかないのに対して、中期（図9右）になると内陸の開発が進み、地域全体に多くの拠点集落が作られたことがわかります。

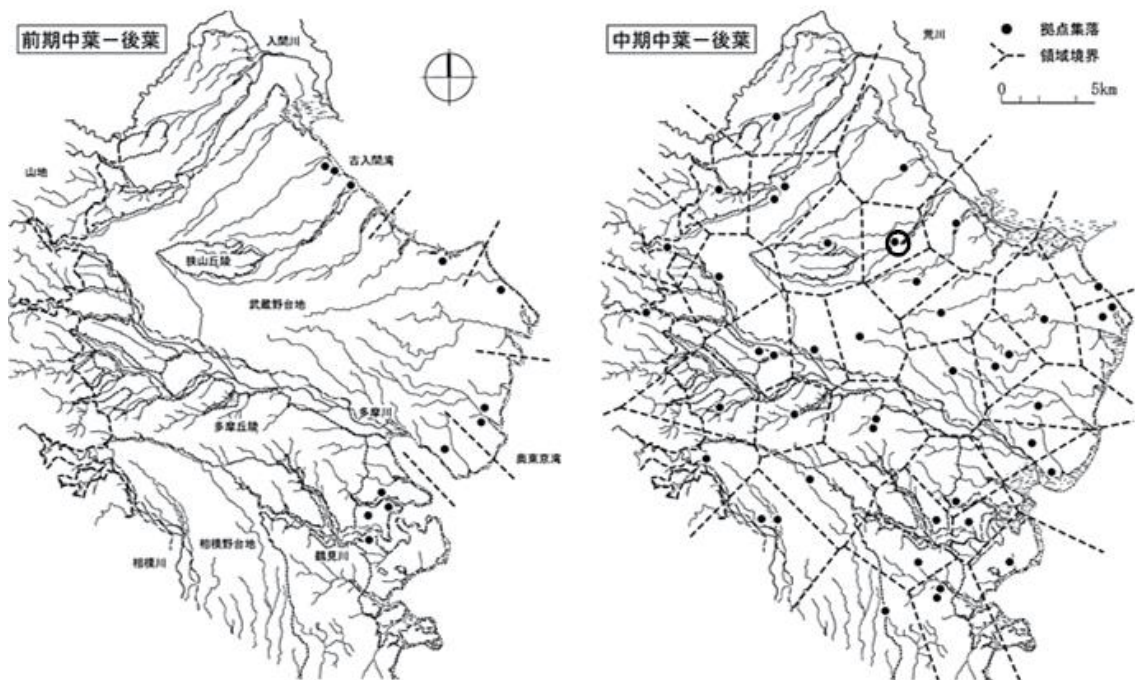


図9 拠点集落の分布からみた領域規模と人口密度の時期差

谷口先生が、拠点集落の分布に基づいて推定した中期集落の領域の面積は、約 50km<sup>2</sup> 未満です。これは狩猟採集民の領域としてはとても狭いそうです。このような領域がそれぞれ隣接して、平和的に集落を造営できたのはなぜでしょうか。

ここで注目されるのが縄文農耕論です。狩猟採集民とされる縄文人たちが、栽培もしくは農耕といった食糧生産も行っていたのではないかと考えられているのです。

縄文時代に農耕があったのではないかと、という研究は1920年代からありましたが、遺跡からは間接的な証拠しか見つかっていませんでした。ところが1980年代以降に調査研究法が変わり、植物考古学が進展したため縄文農耕説の証拠がでてきたのです。重要な方法の一つが水洗選別法、もう一つがレプリカ法です。

水洗選別法は、発掘調査で掘り上げた土を、目の細かい篩を使って水洗いします。植物種子や魚の骨といった、シャベルを使った通常の発掘では見逃してしまうような小さなものも、回収し

て分析できるようになりました。

レプリカ法は、土器に残された植物などの圧痕を、シリコンで型どりをして圧痕のレプリカを作り（図10）、レプリカを現生種と比較して、種別を同定します。



図10 レプリカ法

左：圧痕にシリコンを注入しているところ 右：圧痕のレプリカ（シリコン製）

### 清瀬の縄文ムラと縄文農耕

縄文時代の植物栽培では、エゴマやクリが知られていました。レプリカ法によって、縄文土器の圧痕から、ダイズ属、ササゲ属といったマメが検出されるようになりました。縄文人たちがダイズやアズキの野生種を利用しながら、大きい粒がとれるものを選択していった結果、粒がどんどん大きくなり、栽培種に変化していったことが、土器圧痕の研究から明らかになっています。小畑弘己先生の研究で、その変化が縄文時代中期に起こったことがわかりました。

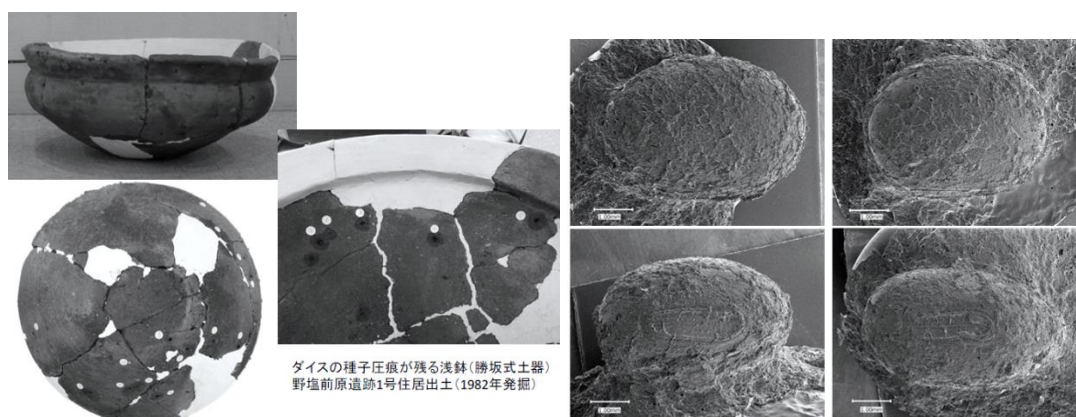


図11 左：ダイズ圧痕が検出された浅鉢（野塩前原遺跡、清瀬市郷土博物館蔵）

右：浅鉢の圧痕レプリカ 電子顕微鏡写真

清瀬市史編さんのための調査でも、レプリカ法を取り入れ、土器の圧痕調査を行いました。

野塩前原遺跡 1 次調査 1 号住居址から出土した勝坂式土器の浅鉢からは、35 点の圧痕を検出し、ほとんどがダイズ属と同定されました (図 11)。縄文時代中期の文化の隆盛と、人口増加の背景にはマメの栽培もしくは農耕の技術があったことが、清瀬の縄文ムラからも言えそうです。

最後に、つぎの 2 点が今後の重要な研究課題としてあげられました。

- ① 縄文時代の農耕技術をどう評価するか
- ② 縄文時代後期になると遺跡数が急激に減少し、内陸の縄文文化は衰退するがそれはなぜか

②について、谷口先生は富士山の火山活動や気候変動が原因となった可能性を指摘されました。



#### 参考文献

- 今村啓爾 1997 「縄文時代の住居址数と人口の変動」、藤本強編『住の考古学』同成社所収
- 大平山元 I 遺跡発掘調査団編 1999 『大平山元 I 遺跡の考古学調査』
- 小畑弘己 2016 『タネをまく縄文人—最新科学が覆す農耕の起源—』吉川弘文館
- 谷口康浩 2009 「総論：縄文時代の生活空間「集落論」から「景観の考古学」へ」、小杉康ほか編『生活空間：集落と遺跡群（縄文時代の考古学 8）』同成社所収